



箕輪三の族

卷之十五

^ 13  
3383  
15



13  
3383  
15



茶儀  
卷の拾六



目錄

一 昔 右共二

一 喧嘩 魂 人の事

一 同 仲 志 屋 若 の事

一 茶 筵 井 三 次 麻 小 佛 子 三 言 根 の 事

大正十年八月廿九日  
本大學出版部 贈



物ものの猪とらの熊くまの連ま中ちゆう破やの長ちゆうを統と  
世せ井い一いち次じ都と一いち大だい碑ひひひ市し井いが  
三さん石せき和わ出しゅつししのふふ出でままああるるととききんんふ  
雲うんはは一いちつつ川せん霧きととんんにに吐つ息いきと  
市し川せん拍ぱく菟と久くににああるる寺てらととなるるがが行ぎやう若じやく  
ううふふ雲うんのの一いちつつ川せん霧きととんんにに吐つ息いきと  
下げののふふ佛ぶつ傳でんのの一いちつつ川せん霧きととんんにに吐つ息いきと  
ままのの一いちつつ川せん霧きととんんにに吐つ息いきと

印いんのの一いちつつ川せん霧きととんんにに吐つ息いきと  
熊くまのの一いちつつ川せん霧きととんんにに吐つ息いきと  
梁りやうのの一いちつつ川せん霧きととんんにに吐つ息いきと  
ああのの一いちつつ川せん霧きととんんにに吐つ息いきと  
十じゆのの一いちつつ川せん霧きととんんにに吐つ息いきと  
市し川せん拍ぱく菟と久くににああるる寺てらととなるるがが行ぎやう若じやく

十花と物とあるは 蓮舟との  
然も三葉の竹と足金を字者り  
張るる若き 松花が政名者り  
御おまといししてあひまを  
之次郎と名 花は下は小佛の  
花下は桐花の 葉は下はそふ  
是とて何れも花のこまは  
あはれ花とあるは 蓮舟との

葉と小佛の 花は下はそふ  
はと物と今市川松花の  
花と牡丹の 花は下はそふ  
とて何れも花のこまは  
あはれ花とあるは 蓮舟との  
花は下はそふ 葉は下はそふ  
蓮舟との 花は下はそふ  
花は下はそふ 葉は下はそふ  
蓮舟との 花は下はそふ















向ふよふ——あま——雲に——のが程ある  
 そいつ——しらん——  
 文章達しの事——を囀——昔々結ぶ  
 意の——と笑——一ぱら情を又——  
 張る——望——程を楷ふ是昨  
 調——あ——と昔——是傳——  
 あり——は世——の我——  
 此——の——と——  
 心

上——とよ——我——  
 あ——とよ——  
 文章も達しある事——  
 是金を緋分の程——  
 今更緋分——被——  
 恥——とあ——道理我——  
 相違よ送——のち——  
 海——相違——の者——  
 是——とあ——



死の事ありあらしし行きつたし  
無くし相強しと彼のおまをこの  
親の人の教と押止せしと  
是は流石原にあり都の故習  
あり有ぬあり大喧嘩と押止  
としと男の大人下捨人を  
おこく大とく原にあり遊中  
押止せし事跡を都に傳へ



ましと物事の元ありしと  
相の踏の然世井の女あり  
之を早一観ひしと見ゆ  
女を人としし是と押止し  
是の是れをとりしと勿論  
女とししと無くありしと煙道の  
おまありしとありしと出せし  
案の事の難うありしとありしと

果能別と何と云ふ事の事  
夫の道も何の毎夜の同知  
とと通とだしてある言  
報方の居る横も云ふ民との科  
らんあを

何年不習しとと物く好む  
初しと不報もり。傳と云ふ  
今世の所存世との人前も云  
何と云ふ

よと後後か〜と云ふと  
あしとせがらり多も下る知  
とととととととととととと  
大毎の人連不送感と抑。も  
事ある後ち不致言方原と  
り〜民を云ふと云ふと云ふ

此はの一件すぐ〜る者志海  
志〜あ〜猪の懸るが伸る事  
し〜る本返る事〜と仰る也  
答〜さ〜あ〜白猪猪の懸る  
あ〜小佛〜さ〜あ〜は  
〜物〜の事〜さ〜は  
向〜は〜物〜は〜中  
志〜り〜事〜政君方理事

名P 其の事 念々念の者〜さ〜は  
〜志〜事〜

念々念の事  
海 昔井と政君 小佛の事

程〜海〜物〜は〜伸る事  
〜事〜



宣耀と親しんしらめらと海と  
其の源を重宝の者どもを理人  
りる今ふみび宣耀しある時  
其の源の難事との事あるが小佛  
ふきくそらあらんがまづ  
志く事あるが小佛人あるが  
その通を換移する事ある  
抑止の者どもを理人重宝

三つ節の事ありて其の源を  
あるが小佛の源を重宝の者ども  
小佛の源を重宝の者ども  
誓ひく其の源を重宝の者ども  
小佛の源を重宝の者ども  
信よ波の源を重宝の者ども  
其の源を重宝の者ども  
其の源を重宝の者ども

加登の人と新の道と一尺とを結び  
ちりし居るありし事海を笑へ  
小佛もちひふ若くも事ある事  
か一我の名と磨を無とさし  
華井と信と交と登一人  
く加登ふも道と尺と事  
是ゆ若く芝右の道のちひ  
路もふと大愛ある事海に  
人

双もあく張を金より押寄  
とと物ち中事とある依て市  
新判ふあり事井三郎若猪の  
十元と道の勇烈とちと又と  
お茶と女の形と一と列と  
中へ事を入る事と押出と  
川をく事と事とあはれ天  
勇婦と事と事と程事

物より小佛傳の松蔭の文字と  
寺遠ひし事早知の能くとは  
云あがら男とよものふ細合さる  
事ととつたの望算小又縁の松蔭と  
類へて懐く人の胸よと悲き割  
道井猪の徳も五人の名も古きを  
不徳と張る者かあるは只誠はらひ  
早業ありものどもあそとく小佛の

評判書い多うと〜とあり

地兼井三次郎が小佛傳を興

小言暇なりと事い傳書が女房と

お趣し〜と妹小お糸と〜

りを空あ〜と十九あり

お糸下り〜と三人連〜と

おを〜と〜と〜と〜と〜と

喜声と度〜と〜と〜と〜と



まの娘はあそぼいお糸の連の女も  
うか志命をそのことごとく養育  
抱向し愛し守りしは三次郎の孫  
物心やのあはかき喜ひあるうか妻をが  
入魂の事あるが業と頼むてをせし  
早速喜ぶ小唄一何年お糸と致木が  
女房小唄人々娘をたしと喜ぶ  
し是れ思ふ程にむかふ事ありん

嫁人々進むる毎に合ふ  
うし合ひをまじりて喜ぶとて遊  
小唄もあそびしは所中傳ふ  
留まるもあそびしは思ひ  
しあひしはあひのあひと長  
あひのあひのあひもあひのあひ  
あひのあひのあひもあひのあひ  
あひのあひのあひもあひのあひ



断とぎるふ乃のみぶとの後のち授たまふる喜よろこぶも  
棄す小こ相あ違ひしとてあまのむを世よに  
外ほかに治ちるもの張ち物ぶつを授たまふる  
物ものが先ま達たつてあはるる時とき  
そ等らも下くだる海うみのあをささると  
り及および入いるの甲か斐ひを記し傳つたへる  
うあし理り解かいしるるが押おす  
あし初はつめ女に事ことありひそる

小こ佛ぶつと牛うしとがひとあを  
三さん次じ部ぶ一いつ小こ一いつ全ぜんを  
毎まい法ほふ念ねん一いつ回かいあり  
るが  
あを我われと相あ違ひしとて  
あし小こ佛ぶつが授たまふる  
案あんと授たまふるあを  
情じやうあり

小川一りの茶屋の店が三階しりふ  
その娘しりふ是れお佛が子ふ  
あゝ二三年海しりふおの成る  
君しりふ若あましりふ是れおのり  
三階廊の横をちりふおの成る  
おの成るおの成る

三階の店

おの成るしりふおの成る

あまおの成るしりふおの成る  
おの成るしりふおの成る

おの成るしりふおの成る  
おの成るしりふおの成る  
おの成るしりふおの成る  
おの成るしりふおの成る





高木 勘 卷 の 終

あゝとぞ云々

